

『老人と海』をめぐって

山 田 富 貴

「自然は神を隠している」という、しかし、
だれにたいしてもというわけではない。

—ゲーテ『箴言と省察』—

夏になると高校生は、読書を始める。書店に並ぶ推薦図書 100 選の中に、決まって『老人と海』が選ばれる。夏の読書には、海を背景にした「若者」の「物語」の方がよりふさわしいのだが。しかし、彼らの読みの中では、作中の「老人」は、決して老人なのではなく、雄々しい「若者」が主人公であるようだ。ある錯誤の中で、読者は老人を若者に読み替えているようだ。読み方の「パターン（教訓を読む）」に即して青年らしい「解釈」を求めようとするからなのだろうか。夏休みという長いまどろみのような日々から生まれた、「読書」という異時空中で、衰れで、惨めで、無力で、醜怪で、そして何よりも孤独であるはずの、いわゆる「老人」が、大魚と格闘する闘士に変身する、からなのだろうか。少し、砕けた物言いに翻訳すると、筋肉隆々のマッチョな老人が、魚と格闘し、敗れさるという姿が、闘うヒーローのアイコンが現出することを可能にするのだ。

それにしても、『老人と海』の中に彼らは「老人」を読もうとはしないのだろうか。死と絶望と諦めと経験と狡猾さが、「老人」の意味論をもつばら構成するならば、少なくとも老人は、その成熟した認識のゆえに、若気の至りのような「振る舞い（冒険）」には、関心を向けないはずだ。まして約束さ

れない「明日」であれば、そのために、戦う意志をもつことなどあらかじめ放棄されているはずなのだ。夏の読書では、どんな物語の海で、何を、彼らは読もうとするのだろうか。

I

タイトルの「老人」に関しては、あらかじめ読者が認識の錯誤に陥ること、つまり、「ありうること」と「ありうるはずもないこと」との間にある認識の垣根が「曖昧に」取り払われ、「正体 (=表象)」とその「隠蔽 (=字義的)」を通して、テキスト化がなされる。一元的な意味の中に「閉じ込め」られることはなく、常に開かれることを予期した物語が、幾層にも重ね合わされてあるのだ。「老いた漁師が沖に出て、大魚を釣り上げたが、鮫に襲われ格闘の末、疲弊しきって港にかえる」という表層的な (=字義的) 構造は、どこかに錯誤を誘う読みを孕む。

以下においては、一つは超自然的なものと人間、一つは自然との対峙する人間、という視点から「老人」のテキストを見ていくことにする。テキストに内蔵されるいくつかのテキストを開いていくことになる。開かれたテキストの読みとして、聖書がテキストとして重ね合わせられていることから始める¹⁾。

少年と老人の結びつきは、「魚をとる」という行為にあり、ここにキリストと使徒の関係があらかじめ築かれる。聖書(「マタイによる福音書」)から該当箇所を引用する。

And Jesus, walking by the sea of Galilee, saw two brethren, Simon called Peter and Andrew his brother, casting a net into the sea: for they are fishers.

And he saith unto them, Follow me, and I will make you the fishers of men.

And they straightway left their nets, and followed him.

And going on from thence, he saw other two brethren, James the son of Zebedee their father, mending their nets; and he called them.

And they immediately left the ship and their father, and followed him.

(Matthew 4: 18-20)

ここに述べられているのはイエスが四人の漁師、ペテロと呼ばれるシモン、その兄弟のアンデレ、とゼベダイの息子ヤコブとヨハネを弟子にした件。さらに、弟子の中から十二人を使徒として選び、「神の国の到来」を述べ伝えるべく、遣わした。彼らは、「人を漁る者 (fishers of men)」として、キリストに付き従ったのだ。この使徒の中でペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人は、常にキリストと行動をともにし、とりわけて、ペテロとヨハネは、キリスト教会の発展にもっとも貢献した、と言ってよい。この四人の漁り人の中で、キリストともっとも近いのはペテロだった。これを少年—老人の関係に置き換えてみると、『老人と海』の中では、以下のような会話が見られる。

これまで老人は少年に魚をとる術を教えてきた。そして少年は老人を慕っていた。

「いけないよ」老人は言った。「お前の乗っている舟には運がついている。仲間といっしょにいることだな」

「でも覚えているかな！ 87日間も不漁続きで、そのあとで、3週間ずっと毎日、大きなやつを何匹も釣ったことがあったじゃない」

「覚えているさ」老人は言った。「知ってるよ、お前が離れていったのは、おれの腕を疑ったからじゃない (I know you did not leave me because you doubted me.)」

「お父つあんだよ、いけないって言ったのは。ぼくは子供だ。言うことをきかなくてはならないんだ」

「知ってるよ」老人は言った。「そういうもんさ」

「信念がないんだね (He hasn't much faith.)」

「そうだ」と老人は言った。「だが俺たちにはそれがある (But we have.)」²⁾

この場面において、少年は老人の舟に乗ることができない、と言う。これは、老人を「否む」ということに（理由はどうあれ）なっていることが示唆される。聖書のテキストの中では「否む」という行為には見逃せない意味が含まれる。さらに、踏み込んで読み進めば、二人の会話の中で、「お前は私の腕を疑ったからじゃない (you doubted me)」という老人の言葉は、少年の「疑い」に言及しているのだが、この「疑い」はそのまま、ペテロが、イエスがキリストであることに抱いた疑念に重なっていく。老人が少年に「魚をとることを教えた」のは、「人を漁る人（人の魂をとらえて神に導く使徒）としよう」という聖書の中の言葉に重なる。そして「信念がないんだね (He hasn't much faith.)」「俺たちにはそれ [=信念] がある」のやり取りを取り上げると、faith の意味には、世俗的な「信念（気力、元気の類）」だけではなく、「神の国が来たこと」と、伝道への使命を確認するという二重のテキスト構造があると解することができる。

ペテロの「拒絶」に関する聖書の箇所は以下に示す。

Jesus said unto him, Verily I say unto thee, That this night, before the cock crow, thou shalt deny me thrice.

Peter said unto him, Though I should die with thee, yet will I not deny thee.

(Matthew 26: 33-34)

Now Peter sat without into the palace: and a damsel came unto him, saying, Thou fellow was with Jesus of Galilee.

But he denied before them all, saying, I know not what thou sayest. . . .

Then began he to curse and swear, saying, I know not the man.

And immediately the cock crew.

And Peter remembered the word of Jesus, which said unto him, Before the cock crow, thou shalt deny me thrice, and he went out and wept bitterly.

(Matthew 26: 69-75) (下線部筆者)

ペテロの拒絶（「その人を私は知らない」）は、きわめて人間的な弱さと、それゆえに信仰を維持し続けることは難しいことを言い表す。イエスは預言の中

で「三度、私を否む」と述べる、ペテロの人としての「信」の強さ(弱さ)のみならず、「神の言葉」を伝える使徒としての力量を知っていた。ペテロは聖書に書かれてあるように、イエスの預言通りになったことを知り、「城を出でて、慟哭した」とある。ペテロが哭いたのはイエスを裏切ったことで、人としての弱さが慙愧に堪えなかったか、使徒としての任に背いたことへの呵責なのか、「He that loveth father or mother than me is not worthy of me. (私よりも父、母を愛する者は、私の弟子に値しない。Matthew 10: 37)」とイエスは言う。ペテロは「自分の命を保とうとした」自らに対して、イエスをではなく、イエスの教えを拒んだ自分に涙した。

少年が哭く場面は、老人が小屋に帰った姿を認めたとき、以下のように描かれる。

少年は老人の寝息に耳をかたむけ、その両手を見、顔を背けると声を上げて
哭き始めた。

それからコーヒーをとり静かに小屋を出ていった。道々、彼は哭き続
けた。(… all the way down the road he was crying. (122) (下線部筆者))

少年が哭いたのは、直接には、「老人の手」にある傷を目にしたからである。これは魚との格闘のさいにできたものだが、その外傷を負った哀れな「老人」を思っ、一緒に漁に出て行動しなかった自分への呵責のゆえに涙した、という字義通りの読みがある一方、ペテロが流した涙を少年に重ねると、この傷を聖痕 (stigmata)、十字架につけられたキリストの傷だと見ることが出来る。ここにおいてキリストを三度否んだ使徒ペテロは、少年に魅つた。ここに二つのテキストが交響することになる。少年に老人の舟に乗るな、と言ったのは少年の父親であり、彼はこれを振り払って、老人に従うことができなかつた、つまり「弟子に値しなかつた」のだから。

つぎに、ヘミングウェイがキリスト的な登場人物を作品中に配したという

Baker の指摘に倣って³⁾、老人の描写における聖書の引喩について考えてみる。『老人と海』の小説テキストはある、として。いわゆるテキストというものがあるのではなくて、テキストとテキストの間の「関係性」において「ある」ということになる。作中、少年が老人との会話の中で漁師としての力を褒める場面を以下に示す。

「一番えらい監督はだれ？ 本当は？ ルク？ マイク・ゴンザレス？」

「みんな同じようなもんだろう」

「そいで一番えらい漁師はおじいさんだね (And the best fisherman is you.)」

「ちがう。俺はもっとえらいやつを知っている」

「とんでもない (Que va)」と少年は言った。「そりやうまい漁師はたくさんいるよ。すごい漁師だって中にはいる。でも比べるような漁師はいないよ (But there is only you.)」

「ありがとう。お前は俺をうれしがらせてくれる。えらい魚が現れて、おれたちの考えをひっくりかえしてしまわないよう祈るだけだ」(23)

少年の言葉を手がかりにして、老人を見てみると、魚をとることを生業とするものは多くいる、腕のいいのもいるが、漁師といえるのは、老人だけだと言っている。これは不漁つづきの老人への同情、慰め、ではなく、比較する根拠を持たない少年には、「比較」を超えた絶対的な漁師 (=人を漁る人) としての存在を見ている。言葉の中の only は、数多くある中でも唯一の、という字義ではなく、比較を超えた単独者として、singly にとらえられた存在なのだ。つまり、only begotten Son of God という文脈で考えるべき only なのである。「神の子」はイエス以外にはいない、というコンテキストで only you をとらえると、漁師に値するのは老人だけだ、というのではなく、世俗的な意味の向こうにある、比較を超えた存在が、あえて「崇高な」という形容詞は付与しないとしても、少年の中に意識化されている。

老人がイエス像に近づいていくこと(「変貌」)について触れるために、マ

タイ福音書からイエスの「変貌」に関する記述を引く。

And after six days Jesus taketh Peter, James, and John his brother, and bringeth them up into a high mountain apart, and was transfigured before them: . . .

(Matthew 17: 1) (下線部筆者)

上の一説はイエスの transfiguration (変容) に関するもの。字義としては、キリストの姿が山上で神々しく変容することを指し、宗教的な意味を担う。世俗的な「意味」としては、美しいもの、あるいは力強いものへの「変容」を指している。老人もまた、少年の目には、見かけは哀れなただの老人から「神々しい」存在へと変わっている。

少年が戻ってきたとき、老人はいすの中で眠っていた。太陽はもう沈んでいた。少年は軍用毛布をベッドからもってきて、後ろからくるむように老人の肩にかけてやった。

奇妙な肩だ。老いてはいるが力がこもっている。項の線も依然として強くこうして眠って前かがみに頭を垂れていると、皺もほとんど見えない。(18)

「変容」は、肩に示される。老人の肩が「不思議な肩」であるのに少年は気づく。「こんな老齢でありながら、にも拘わらず力強い」のだ。少年の目には少なくともそう映じた。老人の「不思議」は少年の目から語られ始める。「老人」の無力が、その「貧しさ」こそがリアルな「老人」の意味論を形成しているはずだったのに、老人は力強くて、不思議を備えた「存在」へと変容を示し始める。地上的なものを超えていく存在へと変容していくのだ。少年の眼前に展開しているのは「驚嘆すべき出来事」であり、そこに神の子イエスの山上での姿に似せて読みこむことはできないだろうか。イエスとその弟子をめぐる聖書のテキストは、老人と少年との交情に重ね合わされる、というように。

宗教性を色濃く描き出して、超自然的な世界との交信を表出しえている場面は、小鳥と老人との海上での語りであり、これはアシジの聖フランチェスコ (St. Francis of Assisi) の「物語」をサブ・テキストとする、と読める (原文の

まま)。

A small bird came toward the skiff from the north. He was a warbler and flying very low over the water. The old man could see that he was very tired.

The bird made the stern of the boat and rested there. Then he flew around the old man's head and rested on the line where he was more comfortable.

"How old are you?" the old man asked the bird. "Is this your first trip?"

The bird looked at him when he spoke. (54)

こうした、聖フランチェスコを想起させるテクスト（小鳥との交感、自然の賛美、及び霊的なものとの交流）は、とりわけ魚と老人をめぐる物語の基層をなすと考えられる。それは、（絶対的な）孤独と死を基調とする物語だ、と言ってしまおう。「老人」であることの基層的な概念もその逆説も意味の揺らぎもすべてこの物語の基調に依っている。「死と孤独」という老人の物語の基調とは、自らの存在を超えるものに「身をゆだねる」、ゆえに「死」に向けて、抗う姿勢を見せないことだ。服従（obeyの語源はaudire（聞く））の基層的な意味が「耳を傾けて聞くこと」にあるなら、海における老人は、人と人以外の存在との間にある、交感の垣根を取り払い、鳥という存在に向けて「対話」を試みることで、「聞く」姿勢、すなわち「従容」として運命に抗わない態度を示しているに他ならないのだ。一人広大な沖合いに漕ぎ出す、単独者、老人の孤独はそこにあり、超越者との対話への契機がそこにおいて生じる。あるいはそこにおいてしか生じない。「他者を疑ってかかることが自分の威厳、つまりは自分の価値と職業的・知的な高潔さを守ると考えるのが一般的な文化では」⁴⁾、あるいは、「懐疑」を美德とする精神構造においては、「小さき命」への思いが、大きな命に通じるという逆説に行き当たることはないのだ。「老人が語りかけるとき、確かに小鳥は、老人を見つめていたのだ」という一文は、自然との融和（大きな生命の発見）に向かって老人を導いていく糸⁵⁾の働きがそこにあることを暗示している。

"Fish," he said softly, aloud, "I'll stay with you until I am dead." (52) 「魚よ！死ぬまでお前に付き合うぞ」と、再三老人の口をついて出る、魚に対

する呼びかけ (vocative) に注意を払ってみる。この言葉「サカナ」は、単なる生命体を超えた、霊性が付与される。「イエス (I)・キリスト (X)・神の (Θ)・子 (Υ)・救い主 (Z)」のモノグラムを表すギリシャ文字は「サカナ (ϰθυτ)」と読むことができ、3~4世紀における初期キリスト教徒は、カタコンベの壁にサカナの「絵 (イコン)」を無数に描いたことはよく知られている⁶⁾。ローマのキリスト教禁教の時代においては、弾圧を逃れてささげられた密かな、命がけの「祈り」がこのイコンに共鳴しているように思われる。そして、ビザンチン絵画においては、キリストの最後の晩餐の食卓には、パンとぶどう酒ではなく、「サカナ」が描かれる。

「サカナよ！」という呼びかけを、ここでは「神の子イエス・キリストよ！」と置き換えてみるのが可能だ。したがって、老人と魚との格闘は、同時に老人の魂の内部における葛藤として展開していくことになる。「深海の暗闇 (in the darkness of the sea)」(62)に深く潜行し、姿を中々海上に現さない魚は、魂の測りがたい奥底を暗示し、しかし老人と魚は釣り糸によって、確かにつながれているのである。深海を潜行する魚に曳かれながら、危うい小舟を操る老人、というイコンは、暗闇にある「見えざる存在」に引き寄せられていく「人間の存在」の脆弱さという解釈を、それゆえに救済を待つ魂がそこにあるという宗教的な解釈を手繰り寄せていく。若者と見まがうばかりの「老人」の冒険譚が読者を誘うのではもはやない。人間精神の内部を箱にたとえれば、その中味が何であるのか、箱の中で何が何に感應し、どのように動くかは、それが人の行動、心理に関わる整合的な問題系であるとは必ずしも判断できまい。人は、時に不可解で、不合理な心理に陥り、そのような行動に出ることがままある。それの方が人の本質に近いとみなすことは間違いである、とは言い切れない。

そもそもの老人と海との関係は、何だったか。不漁続きで *salao* に憑かれた老人にとって、急務なのは、貧しさから抜け出す方途を見出すことであり、経済原則に則って行動することだった。漁師としての屈辱を雪ぐとい

う、(世俗的な)現実的な、動機で、老人は海に漕ぎ出し漁をした。魚をとる、という行為そのものに、何か神秘的な要素があったのではない。

であったにも拘わらず、いつのまにか老人にあっては、人の生活に都合がよいだけの経済的な生き物としての「サカナ」が、そのようなものとは程遠い、偉大さにおいて認知されるようになる。「(彼らを平気で殺す私たち人間より)気品があり (more noble)、かつ、有能 (more able)」(63) だという認識にまで老人は辿り着いていくのだ。もはや、老人は一介の漁師として「魚を釣る」のではない。

獲物の回収 (retrieve) を忠実に行うイヌを品性があり、能力が高い、と人は認める。人に固有の、認識の錯誤である。「服従」が美德とみなされた世界観が崩壊して以来、イヌの「服従」に人は、例外的な、あるいは、驚嘆にも値する「品位」「威厳」を見るようになった⁷⁾、と Vicki Hearne は指摘する。裏返せば、老人のサカナへの思いは、海底に潜行し、姿を現さないことで老人の意のままにならないサカナの、「服従」しない意志によって形作られているのである。人以外の、人に服従しない生き物の「意志」に触発されたがゆえに、「高貴」と「威厳」を認めたのだ。「錯誤からの目覚め」がこの認識の逆転の中に見られる。

人の驕りは、たしなめる術もなく、また救済にも値しないことを常とする。その意味で、これは一般的な「教訓」というより、啓示である。「驕るなかれ (Not be proud)」は人の悲劇を予見する言葉として、古くて新しい文学的トポスでありうる。Death not be proud, though some called thee Mighty and Dreadful. . . . これはダンの詩だが、擬人化された「死」はむしろ人 (= 死) そのものと言える。

「私は敬虔 (not religious) ではない」(64) と言いながら、「主の祈りとアベ・マリアを十度唱えよう。この魚を捕らえることができるように、」(64-5) という老人の言葉は、カタコンベの祈りにも似て、わざわざ世俗を装いながら、敬虔を隠蔽する初期キリスト教徒のごとくに、十分に「敬虔」でありう

るという逆説の中にある。

つぎに老人の中にある、「謙譲 (humility)」について Baker の考えに沿って述べてみる⁸⁾。老人は、「世界を支配する見えざる力」に反抗する「白鯨」のエイハブ船長のような悲劇的な人物ではない。磔刑のキリストがそうであったように、何一つ「問われるべき悪行」を犯したわけでもない。にも拘わらず、老人は試みを受ける (原文のまま)。

It is silly not to hope, he thought. Besides I believe it is a sin. Do not think about sin, he thought. There are enough problems now without sin. Also I have no understanding of it. I have no understanding of it and I am not sure that I believe in it. Perhaps it is a sin to kill the fish. I suppose it was even though I did it to keep me alive and feed many people. But then everything is a sin. Do not think about sin. It is too much late for that and there are people who are paid for to do it. Let them think about it. You are born to be a fisherman as the fish was born to be a fish. San Pedro was a fisherman as was the father of the great DiMaggio. But he liked to think about all things that he was involved in and since there is nothing to read and he did not have a radio, he thought much and he kept on thinking about sin. You did not kill the fish only to keep alive and to sell for food, he thought. He killed him for pride and because you are a fisherman. You loved him when he was alive and loved him after. If you love him it is not a sin to kill him Or is it more? (104-5) (下線部筆者)

鮫 (*dentuso*) の襲撃により、捕った魚を食いちぎられ、「前部だけが残った」(96)。老人はそれを見て、「罪」について思う (思念する)。Baker の解釈に依拠すれば、「老人は余りに、人間くさい (human)」のだ。ここでの「人間的であること」は、「関与 (engagement)」をもつことであるに他ならない。だから、倫理的な問題、形而上的な問題に関わらざるをえないのであり、「人間的である限り」において、ノンシャランでいることはできない。それが、「人間的である」ことの意味だ。

人は、「瞬間」という時の粒子が永続することを、あくまで夢想するだけ

の「存在」であり、だから、人にとって、「死」は、言葉という人に固有の「意味性」の創出（「命名行為」）によってもたらされる、虚構化にすぎない。そうした人固有の行為を「無関心 (nonchalant)」と命名すれば、ダブルバインドに陥るのだろうか？

「関わった事柄のすべてについて考えるのが好きだ」という（老人の）言葉は、素朴だ。実体（=死）を伴うという意味で、あるいは、観念や理念、戦略や見通し、といった思弁（understanding = 関わってもいないことの「理解」）に依拠した問題系に属さない、という意味で、こういう「素朴さ」には対象に迫る力がある。これを「老人」が立っている精神的境位だと、わたしたちは受け取ってよい。これが老人の形而上学であり、「人として担うべき、不明な苦しみ」に生きる義人、ヨブに倣う。死ぬことに「(実体的な)⁹⁾意味」があるなら、終わりの無い「存在」には、もともと意味が無いことが「問われなければ」ならない。「所有しているのか所有されているのか」についての回答を、つまり、Have or Have not についての回答を、先延ばしにすること、あるいは、そういう問そのものを回避すること、それが、そも「無関心」だ、という帰結が導かれる。「無関心」は、ある「死」であるが、何かによって引き起こされるという体のものではなく、それ自体が「死」を暗示する。

「ラジオも新聞もないので、老人はたくさん考えた」。これもまた、素朴な因果律である。ラジオが思考の妨げ、となるのは、何も聞こえてこないことが、「聞く」こと、つまり、神の啓示に耳を傾けることになるからだ。ロマ書には *So then faith cometh by hearing, and by hearing the word of God (Romans 10: 17)* とある。聖書解釈の基本は、人は聞くことを欲しないのであり、神の呼びかけには聾者である、という点に存する。「ラジオがない」という理由と、だから、そこに神の声を「聞く」契機が生じる、という結果の、構成的なつながりは、茫洋とした、海の広がりの中でどこまでも素朴に迫ってくる。

「高貴なる (=神秘) 存在」であるサカナを殺す (=労働) とは、人の側の矛盾である。労働と神秘は互いに矛盾する。サカナを殺したのは老人の「傲慢」である、と自ら述べる。しかし、老人は、その一方で、この存在に「愛」を抱いた。高貴なる存在を抹殺することに、老人は、「罪」を自覚した。「罪」が何であるのか、理解できないとしても、「あの魚」を抹殺することは、「一つの罪」なのだ、「それが自分を生かすため、大勢の人を食べさせていくためであったとしても、それは一つの罪なのだ」と自覚した。換言すれば、「偉大なる不思議」を見出すこと (自覚ということ) において、人自らが「持つ」ことを否定しながら、にも拘らず「持つ」ことを止めない、その間に横たわる大きな矛盾を、老人は見出している。「罪」への接近はそこで始まる、そういうものが「謙譲 (humility)」と呼べるだろう。それ以外に、人の自負心もたらす災厄を回避する術などないであろう。

以下に引用するのは、キリスト=老人のイコンを暗示する一説で、実に素朴な描写からなる。文体はよく言われる terse なそれであり、動詞と名詞の単純な組み合わせと and による繰り返し、老人の動きが生むリズムにうまくなじむ。歩むリズムは、十字架を背負って歩むキリストを想起させるのだろうか。肉体が、何かに突き動かされるようになお、歩みを進めるときは、肉体の苦しみと精神の慰安とが調和された、黙々と、かつ淡々とした、繰り返しのリズムとなる。無駄のない (短い) 言葉の響きと、繰り返しがそういう歩みによく似合っているのだ (原文のまま)。

He unstepped the mast and furled the sail and tied it. Then he shouldered the mast and started to climb.

It was then he knew the depth of his tiredness. He stopped for a moment and looked back and saw in the reflection from the street light the great tall of the fish standing up well behind the skiff's stern. He saw the white naked line of his backbone and the dark mass of the head with projecting bill and all the nakedness between.

He started to climb again and at the top he fell and lay for some time with the mast across his shoulder. He tried to get up. But it was too difficult and he sat there with the mast on his shoulder and looked at the road. A cat passed on the far side going about its business and the old man watched it. Then he just watched the road. (121) (下線部筆者)

陸に上がった老人が振り返ってサカナを見る。鮫の餌食となって、形骸化した様は、街の灯に照らし出されて浮かび上がる。「形骸化したサカナ」のオブジェは「頭部と背骨の間の剥き出しになったもの (nakedness)」と描出される。あの高貴で、崇高ですらあった存在に、あったはずの (あるはずの) ものがない状態を指して「剥き出しの状態 (nakedness)」と言っている。人の営み (いわゆる「歴史」でもよい) に対する「敬意」を基本的に欠いた一切の「虚無」がそこに現出したのだ。サカナの形骸化した様を nakedness と捉えたのは鮮やかな表象である。豊穡さに満ちた「海」、深い精神性を湛えた「海」がもつイメージが「陸」に上がったときに、一拳に反 (暗) 転する。豊穡さから、単なる物質へ、豊かな意味の世界から、単なる無意味へと、サカナは変貌する。そのような、存在に呼びかけ、立ち上がらせるイメージの力をこの nakedness (虚無) という言葉は備えもっている。

さて老人は小舟のマストを背負って家路へと向かう。登っていく丘は、しばしば指摘されるように、ゴルゴダの丘を想起させる。キリストの処刑には、二人の犯罪者が共に処刑される。その意味は、イエスは神の子を僭称する「犯罪者」として十字架に処せられる、というのである。彼らは、イエスがキリストであることを知らないで、知らないままに、磔刑に処してしまうのだ。人の無知とは、それほど根深く、またアイロニカルだ。作者は小説の最後に、無知の度し難さについてのアイロニーを挿入した。磔刑のキリストの位相は、そのまま老人に関わる「無知」へと連鎖する。人々の「無知」が老人の孤独を浮き彫りにする。

「あれ何でしょうね？」突然、女が大魚の背骨を指差して、傍らの給仕に聞いた。……。

「あら、鮫ってあんな形のいい、見事な尻尾をもっているとは思わなかったわ (I didn't know sharks had such handsome, beautifully formed tails.)」

「うん、そうだね」つれの男が言った。(127)

この男女の会話に出てくる、「見事な尻尾」には、明らかに、性的な暗喩がこめられており、男女の性愛の行為が営まれるであろうことが暗示される。暗示であることで、むしろ露骨に卑猥が示される。無知などその程度のものであり、歯噛みして怒るほどのことでもない。孤独は、往々、他人の無知を通して、その外姿をアイロニカルに現すものだ、と言える。丘を上る途中で疲労困憊して倒れた老人が、目の端に捕らえたのは、そ知らぬ顔で、遠くの道を駆けていく一匹の猫だった。描かれた「猫」は、老人の「孤独」を前景化する巧みなイメージである。そして、サカナとの邂逅は老人の内奥の（魂の）「孤独」を語る。目の端に捕らえられた猫は、そういう、内なる孤独を形象化しているのだ。それはそのまま、磔刑のキリストに通じる認識の回路となりえている。

しかし、人の無知に抗うことはない。抗えば、絶えざるアイロニーの堆積の中で呻吟しなくてはならないだろうから。アイロニーはどこまでも認識の距離 (distancing) を目的化する。そして、人は死の意味に関して、誰の死に対してであれ、「無関心」であるのを常とする。だから老人は、ひたすら眠り、「ライオンの夢を見続ける」。自ら安らぐことのできる空間で安らぐのだ。

II

この章で取り上げたいのは、人と自然との関わりである。人と自然をどのような層において捉えるかに関して、一般論が種々ある。自然とは何か、に

関する時空間的な考察に始まり、どちらが主体で客体なのか、という関係論に至り、そもそも、人は自然の一部なのか（つまり自然に依存的なのか）、自然とは対立する（つまり自然に対して自立しているのか）、あるいは、時の経過の中で、どのように相互に向き合ってきたか、関係性のきちんとした「総括」は、曖昧なままである。その意味で、人にとっての自然は括弧つきのまま、その意味は揺らぎ続ける。が、ひとまず、ヘミングウェイの『老人と海』に、「自然と対峙する人間」の層を探ってみたい。

ゲーテの自然哲学 (*Naturphilosophie*) についての Albert Schweitzer の見解をここに引く。「真実と言えるのは、思考や想像に依拠して、自然に手を加えたりしない知識のみに限られる。加えて、偏見や先入意識に惑わされない、唯一の真実 (the truth) を見つけ出すのだという悲愴で純粋な決意に惑わされてはならない、自然の奥懐にまで入り込もうとする瞑想もいけない、そういう決意とか、瞑想といったこととは無縁な探求心によって結果されるものだけが正当なのだとみなす知識だけが真実なのだ」¹⁰⁾。ここに披瀝されているのは、科学者であるシュバイツァーの「知識」観である。自然は、人が「永遠の戯れ」（「経験」と呼ばれる）を通して把握できるようなものではない。「限りない自然よ、お前のどこを捉えたらいいのか」¹¹⁾。自然は究めがたい。これが、シュバイツァーの、（ゲーテの）自然と対峙するときの心の位置取りである。

自然は、實在（認識の対象であるので）であり、象徴（あらゆる事例を含むから）であり、そして、あらゆる事例は同一的である。こういう用件を満たすがゆえに自然は「根本現象 (*urphanomen*)」である。経験はここから無際限に増大したものであるがゆえに、経験（「思考」や「想像」、「先入観」、「宗教的な瞑想」といった、人のなす戯れ）に完全を求めるのは絶望的である、とゲーテは「自然」について述べる¹²⁾。このゲーテ的な自然認識の、その半ばは、ヘミングウェイのものでありえた、と Baker は指摘する¹³⁾。

時代的な相違 (社会や技術の「進歩」の度合いのような) が間に横たわっていると考えてもなお、18世紀的な、人の「驕り」と、「われらの時代」の、人の「驕り」との間には驚くほどの違いはない、という言い換えも、また可能となろう。

人にとっての自然は、(言語化、抽象化された)「自然」である、という前提に立って、論を進めたいと思う。が、そのさい、Naturalistという言葉の訳語は、自然主義者、博物学者、自然科学者のいずれが適切なのだろうか。しかし、仮にどういう名前を、時代の要請に合わせて与えたとしても、その本質は、文化の側 (人の側) から「自然」に接近していることに変わりはない。自然研究という形で、テキスト化 (事象の、分析、記述、記録) を行う以上、半ば以上は *Culturalist* であるというアイロニーだけが際立つ。

Susan Beegel は、「ナチュラリスト」としてのヘミングウェイが、作家として成熟していく様子を追いかけた。Beegel の記述に従えば、作家が誕生した時代は、「自然」が人の手によって「支配」を受ける時代であった。彼が生まれたシカゴでは煙突からもうもうと煙が上り、健康が「自然」との相関において論じられ、母親は、子供に自然教育を施すために、夏にはミシガンの森のコテージに連れていき、自然を (から) 学ばせた。この19世紀から20世紀にかけての世紀の変わり目に、「自然に帰れ」という運動が起こった¹⁴⁾。因みに、Theodore Roosevelt が「自然保護 (nature conservation)」を唱導したのは20世紀初頭ということになっていて、つまり、この時期にあって、自然を「保護」する、あるいは自然を「教育」する、という形で、自然がテキスト化されるようになってきた。「自然」はすでに文化の一部となりつつあった。ということは、絶滅種 (endangered species) が散見される時代に入っていたのであり、人が「自然」にとっての脅威となる、あるいは、*human Nature* という反-自然的な「自然」が、自然を僭称する時代へと移り始める。時代は、科学、機械、テクノロジー、のそれへと、経済・社会的には、

生産を専らとする社会から、消費を専らとする社会へと変わる。社会のエトスは「勤勉・節約・禁欲」のそれから、「享楽・乱費・喧騒」のそれへと変わりつつあったのだ。1914年に、passenger pigeon は絶滅した。その移動には、何時間も時に何日も要し、空は闇に一変するほどだった、という。しかし、人は絶滅する種に快哉を叫んだのだろうか。野生、未開を「邪悪な敵」として駆逐したことに、テクノロジーの勝利を確信したのだろうか。「種の絶滅」と「自然保護」、この二つを human nature のフィルターを通して見れば、残虐さと無神経さが表裏をなす一枚のコインということにならないのだろうか。こういうものを「野蛮」であると指摘する偉大な伝統は、アメリカにはなかった、のだろうか。しかし、絶滅する「自然」という、あるいは人の無知という視点から、経済・社会の「進歩」が語られるという「歴史」は存しない。ただし、世紀の変わり目における「自然への回帰」が、単なるブームではなく、ある切実感をもった運動として、20世紀の反-農村的、産業的、都市的な20世紀のエトスに対抗するものだったかどうか、Beegelのヘミングウェイに関する論考からは見きわめられない。

幼年時代に、ヘミングウェイは、自然の中で「生活すること」を教えられる。「自然」を教育することに熱心だった母親の指導の下、食べることから、排泄に至るまで、「自然」に逆らわない術を学ぶ。さらに、彼が受けたジェンダー・トレーニングも特筆すべき事柄であった。より「自然」であるのは、男女の性に関する区別をなくすことである、という「自然教育」がテキスト化されており、男子はより女子に近く、女子は男子に近い教育を行うこと、これこれのものが「自然」だ、としてプログラム化されていたようだ。具体的には、男の子が「優しい心根」をもって花を摘み、男の子にささげる、「Miss Nancy」と呼ばれることに抵抗は生まれたようだが、「自然」にあくまで文化の側から接近しようとする試み (nature study) ではあった¹⁵⁾。ヘミングウェイの幼年期には、「自然」が溢れていた。字義通りであれ、反語的

であれ、どういう意味においても、そういう「自然」が彼の文学形成に大いに与っていたのは事実だ。

Beegel の論考は、Louis Agassiz の「自然教育」が与えた、作家への、そして時代への影響について、さらには当時の「自然保護」の実態、当時書かれた「自然主義的」傾向の小説 (たとえば Jack London のような) の及ぼした影響、厳格な宗教的な雰囲気のある中西部の家庭に、進化論の投げかけた影響等々に及ぶ¹⁶⁾。その論点の中で強調すべきは、人が自然に矛盾的に対峙することである。

まずは、アメリカにおける Hunter-naturalist の伝統である。自然の「観察」は自らの目で「見る」こと、そのために生物を殺し、剥製化し標本とし、自然のテキスト化を試みることを基本とした。Hunter という存在は自然に対する全面的な帰依ではなく、むしろ反-自然的な存在として自然に観察の目 (ある意味で冷徹かつ残酷な収集欲) を向けたにすぎない。ヘミングウェイの子供時代は、Roosevelt が「自然保護」を唱導し始めた時代であり、それは、20 世紀には狩猟文化がアメリカから消滅するであろうという真剣な危惧が生じたことの裏返しではあった。そういう時代だったから、社会に遍く、“Nature Faker Debate” 「自然を詐称することをめぐる論議」が起こってくる。この時代には、夥しい数の、多岐にわたる、自然に関する本 (nature book) が出版されたが、その一方で、「自然描写 (nature writing)」の正確さをめぐる紛糾した。具体的には、いわゆる、教室向けの自然のガイドブック、動物物語、野生の動物記、といった類のものから、「大衆の感傷癖」につけこんで、自然に関する記述を捏造した、いわゆる自然物 (nature-book) に至るまで、金儲けのために出版されたことに紛糾の原因があったのだと、Beegel は Hunter-naturalist に関する記述を展開している¹⁷⁾。

当時の、自然を売り物にする出版、いわゆる nature-book, nature writing の類は、自然と向き合ってこれをテキストにするという試み (収集欲の延長) に始まっていた、と考えられる。「自然をめぐる論争」は、つまり、Fake を

めぐるの論争だった。自然とそれに付随する資源は元来、人のためにあるとする功利的な自然観（経済・社会的な自然の「テキスト化」）及び、読者に阿った、新奇、珍奇を意図した「自然の発見」という擬制的で、かつ謙虚を装う自然観（見世物的な自然の「テキスト化」）など、大小はとまれ、Fakeの問題は、自然を人の都合で描く、いわゆる自然の「ディスコース」をめぐる問題が、喧しくなった時代の思潮を反映している。そう、ヘミングウェイの時代の「自然」について把握しておくことにしよう。要は、自然「保護」といい、自然「教育」といい、しかしどう向き合っても、「人の保護、教育」に資することを究極の目的とするにすぎないのであり、人が自然と向き合うとき、人の側の二元論的（ヨーロッパ・キリスト教文明に固有の）世界観を断ち切ることはできなかつたし、今もできない。老人の見たあの「ライオンの夢」を夢見することは、中々に叶うものではない、というのが正直なところだったのだ。

「死者の博物誌（“A Natural History of the Dead”）」という短編がある。この中では、人と自然との間の深い亀裂を見ることができ、相互に向き合うときのアイロニーを読み取ることができる。「人は標本になりうるのか?」。以下に示すのは作品冒頭の一説からの引用（原文のまま）である。

It has always seemed to me that the war has been omitted as a field for the observations of the naturalist. We have charming and sound accounts of the flora and fauna of Patagonia by the late W. H. Hudson, the Reverend Gilbert White has written most interestingly of the Hoopoe on its occasional and not at all common visits to Selborne, and Bishop Stanley has given us a valuable, although popular, *Familiar History of Birds*. Can we not hope furnish the reader with a few rational and interesting facts about the dead? I hope so. ¹⁸⁾

博物学者の仕事は「自然」の生命、例えば草花、動物、鳥に関して、われわれがこれまでに気づかなかつた事実について探索し、観察し、採集・保存し、記録に留める。さらに、「博物誌」の観点からは、自然界にいかなる生き物が、どのように生息（分布や生態）しているのか、歴史的観点からは、どれ

だけ多様な生命がかつて生息し、今は途絶えたかを記録 (多くは標本という形で「死」を収集) することである。記録する主体は人であり、時にパタゴニアの極地に生息する動植物の生き方をつぶさに観察し、記録することもあり、「鳥」という、神により精巧、精妙に創造された「創造物」の調査観察を行い、その「死」を標本として、記録することなども、人は許される。それは、人が、神からの信任に基づく行為 (Genesis 2: 19-20) であるという (ヨーロッパ・キリスト教的な) 錯誤によるものなのだろうか。

引用文の最後に、前後の関係を示唆する、ならば、という接続辞を欠いた文 (Can we not hope...?) が、いくら唐突な形で現れる。「人の死についての合理的で、興味深い事実を、少し、読者に供することを希望してよいか」と切り出す、「あくまで希望ということだが」、と。冒頭には、「博物学者の観察の場所として、戦場は、はずされてきた」とある、その理由は「戦場が、博物学者にとって格好の観察の場所だからだ」、と読める。むろん、アイロニーに満ちてはいる。従来、戦争が観察の対象から除外されるのは、博物学者の対象が「自然」であって人間を対象にしないからだ。しかし、人が人自らに与えた特権を奪えば、つまり、獣よりも本能を剥き出しにして殺戮を繰り返す、人という「種」の残虐さを humane (人道的な) などという贅言でわずかばかり庇ったところで、人もまた、鳥類、植物などと同じく、その観察・分類上、充分深い対象になりうる、ただの生物種の一つにすぎない、ということになるのだ。したがって、人の死を標本として留め、いつしか絶滅する日に、記録として歴史にその存在を刻む日が来る、と言っているのだ。だから「戦争は博物学者の観察の場となったことが無い」という仕儀に至るのだ。

作者は、第一次大戦に参戦した経験から、痛烈なアイロニーをこめて、humane であろうとする人と人の驕りを捉えた。博物学者の「観察」という行為は、実際に目で対象を捉え、見たままを認識し、正直に結果を報告することで完了する。自然と向かい合うときのヘミングウェイの態度は、まさに

naturalist の「観察」行為に基づいて対象を捉え、作家として、文体にその方法を反映させている。そこに「人と（対峙する）自然」という作家の認識の原点を見る。

以下は、戦線にあって、戦死した兵士の肉体が朽ちていく様を描いている場面の引用（原文のまま）である。

A naturalist, to obtain accuracy of observation, may confine himself in his observations to one limited period and I will take first that following the Australian offensive of June, 1918, in Italy as one in which the dead were present in the greatest numbers, a withdrawal having been forced an advance later made to recover the ground lost so that the positions after the battle were the same as before except for the presence of the dead. Until the dead are buried they change somewhat in appearance each day. The colour change in Caucasian races is from white to yellow, to yellow-green, to black. If left long enough in the heat the flesh comes to resemble coal-tar, especially where it has been broken or torn, and it has quite a visible tar-like iridescence. The dead grow larger each day until sometimes they become quite big for their uniforms, filling these until they seem blown tight enough to burst. The individual members may increase in girth to an unbelievable extent and faces fill as taut and globular as balloons. The surprising thing, next to their progressive corpulence, is the amount of paper that is scattered about the dead. . . .¹⁹⁾

ここに観察者の目がある、「正確な観察」がある。日々刻々と変わる「死体」を凝視している目の存在がある。白人の死体の色が、白から黄、黄から黄緑、そして黒へと、変わる。人の肉はコールタールのようになり、虹色の光をおびてくるのだ。死体は風船のように膨れ始め、軍服の締め付けに抗して破裂するまで膨張を続ける。手足は信じられないくらいに肥大化し、顔は、風船のようにパンパンに膨らむ。そう、人の「死」が報告される。見たままという行為は、対象を感情で覆ったり、包んだりしてはならない。「事実」は人の願いや、希望や、理想が入り込むものではなく、またそういうものを

排除するために殊更、「冷徹」「冷静」な心的態度が求められる、という訳でもない。死者の顔が刻々、白から黒へと変化する様を、時宜を得て、ひたすら「見る」という「観察」行為に、「事実」は起因する。「炎天下に放置された死体には、半パイントもの蛆虫が口中にうごめく」のを「観察」するのは、心を動かすまいとする精神・態度の鍛錬に基づくのではない。徹底して事実が何であるかを見定める眼差し(=行為であって、態度ではない)のことであるにすぎない。

humane というのは、人の死に対して人が取る「心的な態度」であり、そこに内包される人の「尊厳」などは、「蛆虫のたかる死体」の前では、実体をもたない、言語化(文芸評論のごとき)の結果にすぎない。

作中、軍医と砲兵中尉のやり取りは、中尉は、苦しむ兵士を見かねて、安楽死を軍医に求めるが、これを拒む軍医に、You are not a human being (それでも人間か)と毒づく。さらに他人の苦しみを共感できる、と思っている中尉は、I am a humane man (自分は人間味に溢れる)と抗弁する。この二人の相違について言えば、軍医は人の死を「観察」することを旨とする、ゆえに、人は自然の中の「種」である、という事実に関執し、中尉は、人を理念(=言語化)として捉え、だから人の死は無残な扱いをされてはならない、と思う。人間的あるいは人間らしさという観念を抱きしめる以外に人について何かを知る方途をもたないのだ。博物誌の記述から生まれる「事実」からすると、人は、かくも残虐で、殺戮に平然と勤しむ生物種なのだ。人の「事実」の中では、どのようなロマンスを生きたにせよ、人は、死して後、遍く「虹色の光を帯びたコールドール」に変容するのだ。これが、醜悪であれ不快であれ、不謹慎であれ、「事実」なのだ。人は自然の中に包摂されて、自然の大いなる事実の一部に帰還する。

「伝道の書 (Ecclesiastes)」の冒頭には、「空の空なるや、一切が空なり」(Vanity of vanities, ... vanity of vanities: all is vanity.), とある。賢者も愚者も、富

者も貧者も、一切の帰結は「空」である、とする。これは人の側の事情であって、自然の営みにあつては、人の事情がどうであれ、それでも「日はまた昇る (The sun also ariseth)」のである。「一切が空」というのは、人が生きていることの空虚を言い当てていて、20年代の若者に特有の乾いた感性の表現、ある種の反抗的な「身振り」、無軌道な若者の「気取り」、等々を表示する「言葉」とは、なりえていたように見える。聖書が示唆する言葉の中味は、「自然と対峙する人」についての、「事実」を言うにすぎない。One generation passeth away, and another generation cometh: but the earth abideth for ever. The sun also riseth . . . (Ecclesiastes 1: 4-5) 一つの世代が過ぎ去って、新たな世代がくる。これは自然と人との(永遠の)相関であり、自然にとって、「人が滅ぶこと」は単なる人の存在の様式にすぎないのである。「賢者は愚者と同様に死ぬ (1-16)」。(事実としての)「死」は人が何であったかを、弁別しない。賢者に相応しい特別な「死」などなく、愚者に相応しい惨めな「死」もない。これはありふれた、素朴な真実だが、それゆえに、人はこれを人の「事実」として容認することを厭う。「死者の博物誌」の中で扱われる、将軍の死について書かれた本の題名は The Generals Die in Bed ではなく、The Generals Usually Die in Bed とするのが、正確であることをわきまえた者のすることだ、と皮肉を添えた²⁰⁾。「事実」から、「倫理」や「寓意」を無理やり引き出すのは、反-自然的存在としての人の、陥りやすい旧弊である。

『老人と海』の自然に戻ろう。アジサシ (tern)、飛魚、という小さな生命との交感が、自然に戻るといふ人為的な身振りであるより、自然そのものであることを表現している。美しい情景を、言葉が紡ぐ。とりわけ、delicateという言葉は、人-自然の相関について、ヘミングウェイの自然意識の基層にあるものを示唆している、と思う。

He was very fond of flying fish as they were his principal friends on the ocean. He was sorry for the birds, especially the small delicate dark terns that were always flying and looking and almost never finding, and he thought, the birds have a harder life than we do except for the robber birds and the heavy strong ones. Why did they make birds so delicate and fine as those sea swallows when the ocean can be so cruel and it comes so suddenly and such birds that fly, dipping and hunting, with their small sad voices are made too delicately for the sea. (29)

老人が向かうのは「海」だが、原語は on the ocean となる。つまり、老人は「遠く沖合い (too far out)」(14) に漕ぎ出して外海へと向かったのであり、だから沿岸で細々と漁を営む漁民ではない、と知れる。Ocean は詩語であり、単に、陸との場所的な対比を示す記号に留まらない。この言葉によって、精神の働きが投影され、美意識が触発され、覚醒に向けて、「空間的な広がり」の中に参入していったことが示される。同時に陸を遠く離れることで、「陸」に与えられた逆の意味が暗示される。「陸」は、生活の困苦に拘束され、妻を亡くした悲しみに囚われ、功名心に苦しむ、といった、一切の「閉塞」を人に強いる。飛魚が友人であるというのは、ありがちな自然讚美のように聞こえるものの、老人と生命との一体化を、詩的な素朴さで表している。

老人は小鳥を不憫に感じる。とりわけ広大な大洋の真中で出会う tern (アジサン) に対して思い入れをもつ。人の思いを相互に重ねることが「対話」というなら、人と小鳥の「対話」が、ここに、「奇妙に」成り立つと言えよう。

アジサンの生態は、「自然」の現象として、まさに人の想像も認識も遙かに及ばない、ある「驚異」ということになろうか。が、それについての博物誌的な詳細については、本文中では、一切触れられていない。くだけた説明をあえて加えてみると、アジサンは旅鳥で、鳥類中でもっとも長い距離を移動する (毎年 35,000 km)。フロリダ周辺では、5月に北を目指し、9月に南を目指す。毎年このような距離を移動すること自体が「離れ業」であり、

もっとも強靱な意志力を湛えた鳥，ということだ。注釈的な説明を加えたことで，老人とアジサシの関係がつかみやすくなりはしたが，文学的な味わいは，不要な説明によって損なわれる。「鳥というものは，人が想像するより，ずっと辛い生活を送っているのだ」，と老人は述懐する。老人がアジサシを見たそのままの述懐が，「アジサシは鳥類の中でもっとも長い距離を行く旅鳥だ」という「事実」と，だから，この小さな鳥がいかに強靱であるか，というあらかじめ削ぎ落とされている「事実」に触れることになる。不要で，不純な説明的知識は，素朴な感慨のもつ「正確さ」をただ損なうのみである。「抽象化されて具体性を削ぎ落としたディテールを選択することで，あらゆるものが視覚化される。視覚化されるだけではなく，極度にリアルな幻想（錯覚）を与える。ヘミングウェイのリアリズムは，見られているものの中に（what is seen）成立するのではなく，誰かが，じーっと，目を離さないで見ているという事実（the fact that someone is intensely seeing）の中で成立する」²¹）。そういうものが「高度に印象的な描写」なのだ。説明的な描写をあらかじめ満載したアジサシに比べて，全く説明を削ぎ落とされたアジサシの方が遙かにリアルな鳥だという錯覚を与える。受け手の側の反応について，私見を加えれば，読む者の思い入れ，思い込み，による「誤読」が発生する契機はここに生じる。説明の中のアジサシより，「誤読」によって作られた，幻想の小鳥の方が，ずっと美しく，かつ，力強く，想像の海を渡っていくことになるだろう。それは間違いない。自然は，そういう形式（説明と幻想の間で生まれる，人の側に一方的に偏った認識法）でしか，人と向き合うことがないのだから。

delicate は「蝶の翅」のごとき傷つきやすさ，脆弱さ（frail）を意味し，明示的な意味は，小鳥の肉体的なひ弱さを指す。が，これをヘミングウェイに固有な意味へと拡大すれば，小動物（あるいは小さな生命）と海（＝自然）との関係性を暗示する。大胆に，自然（Nature）と対峙したときの，生命体の「無力さ」（helpless）と読んでもよいだろう。

「海が荒れ狂う」ときは、あのような無力で繊細な (delicate and fine) 鳥はひとたまりもない、と老人は鳥に向かって語りかけている。それは老人が、鳥との「対話」の中で海 (=自然) に触れるとき、共感的に手繰り寄せられる言葉が delicate であり、鳥との交感 (言語を超えた「対話」) において成立する共通の「言葉」ということになる。その意味では delicate が人の文化の微妙な差異を表示したりするのは異なる。物語における、異界と現世をめぐる意味作用の二重性を示すことになる。

脆弱な存在 (人も小鳥も同じく) にとつて、だから、自然の「意味論」は不確かであり、時に「闘いの相手」(30)「仕事場」(30)「敵」(30)であったりする。常に、人にとっては、不確かな対象であり続ける。海を指す言葉も *la mar* であったり、*el mar* であったりする。実体として、「海」そのものを人は捉え切ることができないのである。それは、そのまま、人と自然が対峙する見取り図を提示する。不確かな「意味論」の中にあるがゆえに、われわれは「意味」の世界を作り出し、海との間に、時に「友」であったり「母」であったり、という恣意的な関係性を見出していく。そのように構築物としての「世界」が構成されていくにすぎない。テラスに出入りする漁師たちは獲物をめぐる、ハバナの魚市場に向かう「冷凍トラック」が介在する経済・市場の原理を仲立ちとして、海との間に関係を取り結ぶ。人が自然 (a nature) を支配しているという人の側の錯覚に基づく関係に寄りかかりながら。

海を人生になぞらえる「アレゴリー」の形式をかりて、読者を「意味 (人生訓)」の世界へと誘導していくことは避けるべきだ。「狂える海」は「人が乗り切って行かなくてはならない大いなる障害」、それと闘う人間 (老人) の勇氣 (=実は、支配欲、征服欲に置き換えられる)、という半ば強制を伴うような、ありがちな、解釈はここでは除けるべきだ。

老人の運命の暗転について、海 (=自然) との関連において付言しておきたい。やっとしとめた魚は、一転、鮫の餌食となることで、老人の運命は悲劇へと急転する。Baker の指摘する「緊張と弛緩」という物語のパターン²²⁾だが、サカナへの勝利から一転、鮫の攻撃による敗北というカタストロフィーへと向かって「緊張」の度が深まっていく。海に深く関わった老人が、再び「陸」へと帰還する物語は、冥府からエウリュディケを地上へ連れ戻すオルフェウスの帰還の物語を思い起こさせる。冥府からの帰途、一瞬、振り向いたがために、エウリュディケは地底の闇に再び落ちていったのだが。

凶暴な鮫が、サカナを襲う。人の寓意の中では、つまり人が自然の中に勝手にもちこんだ「善悪の物語」によれば、鮫は凶暴であるだけでなく凶悪 (scoundrel) である、とされる。何ゆえ鮫に倫理が問われるか。老人の人間的な努力を無に帰すからなのか。しかし、鮫は一つの自然であるにすぎない。鮫の合目的性は、「自然」であること以外にはない。悪をなすという目的性が関与することなどありようがない。

Though Nature, red in tooth and claw / With ravine, shrieked against his creed
これは Tennyson の詩 (*In Memoriam*) の一説である。「自然は牙と言わず爪と言わず血だらけにして、人の信仰に襲いかかる」、そして O life as futile, then as frail! 「人の命は、脆弱と虚無ばかり」と嘆く。この詩は 19 世紀半ば、進化論が台頭を見せ始めるころのものだが、人という「種 (the type)」に、どこまでも自然は冷淡なのか、と詩人は問う。

鮫の攻撃に対して、「人は敗北するためにつくられたのではない」(103) 「人は、死んだとしても敗北することはない」(103)、と老人は思う。「敗北しない」と思うのは、人は持続していくから (endure)、その先には「永遠」を信じる心があるから。だから老人は、「銛を鮫に奪い取られ闘う武器はオールとナイフ」(104) となった、にも拘わらず、サカナを鮫から守らねば

ならない、と考える。獯猛に襲いかかる鮫という自然がいて、自らの内面(永遠を信じる心)に真摯であろうとする人がいて、ここに死闘が繰り広げられる。これは自然と人との、壮絶だが、美しい諍いと言ってよい。鮫という「凶悪」を打ちのめさなければならない、と考えるのは、人の「倫理」に根ざした、けちな闘争心にすぎない。守るべくは「その肉が最高の値段で市場にもちこめるから」(106)という世俗的な理由からでもない。というより老人が彼を(サカナ)愛したから、その「偉大なる不思議」(98)と「一切の尊厳」(99)を見たから、ゆえに、その存在の尊厳を守らねばならないと考えるからなのだ。鮫の攻撃はまさに「牙と爪を血で染めた」自然による、人の抱いた「持続」への意志とそれに連なる「神性」に対する攻撃であり、人が死してなお「敗北しない」ことを試すかのような、デモニックな攻撃だった。いかなる不安、猜疑、動揺の中にあっても、オルフェウスが振り返らないことを、試されたように。

結 び

夏の読書は、開かれた空間(例えば冒険だとか、旅立ちのような)へ誘うことを一義としなければならない。そして、自らを仮託することができる人物像を書物の中に探し出さねばならない。そうして後に、夏は終わる。一本の釣り糸で相互に結ばれた、サカナと老人のロマン(物語)はいくつかの意味を紡ぎ出す。だから、老人と冒険、あるいは困難と立ち向かうヒロイックな老人の魚との死闘、いずれも小説の読み方としては不可能ではない。ただし、しかしそれでは、余りに人間を中心にした「読み方」に偏っているのでは、という批評は生まれないのだろうか。であるとしても、そういう点でも、この小説は豊かな、想像的な営みの所産だと言っておこう。この小説を評して、ヘミングウェーは神を見つけた、と書いたのはフォークナーだが、それ

だけに限定する必要もないだろう。

自然について付言しておきたい。ヘミングウェイの生きた時代は、まさしく動乱の時代だったと言えよう。二度の大戦、スペイン内戦、キューバ革命、こういう中で問われたのは、人間 (Human nature) と人間の思想だったのか、という思いが残る。しかし、より根源的に問われていたのは、実は自然だったのではないか。human Nature (人間性と言うより人間の中の「自然」) がいかにも不自然な「自然」へと、やせ細っていくことへの危惧が彼を小説へと駆った、と考えることはできないのだろうか。神戸の震災を目の当たりにしたときに、自然が、「血だらけの牙と爪」を剥き出しにした、と実際にわれわれは感じた、のだろうか。自然を実体として想起したのだろうか。それとも、これは、人事の及ばない天災だとしてやりすごしたのだろうか。われわれの抱く「自然観」そのものが、曖昧なままの (実体を欠いている) ような気がしてならない。その一方で、人という種そのものの存亡は、自然の「手」の中にある、という冷厳な「事実」が、この作品の中には、明確に示されていると思う。また、そういう事実を作者はよく心得ていた、とも思う。その意味で、文学をものする人であって、同時に卓越した自然観察者でもあった。

〔註〕

- 1) Santiago 老人と「漁師、使徒、ガリラヤのイエス、殉教者」という結びつきについて最初に指摘をしたのは、筆者ではない。Robert M. Brown が *Modern Fiction Studies* 1 (August 1955) において指摘した。
- 2) Earnest Hemingway, *The Old Man and the Sea* (New York: Charles Scribner's Sons, 1952), pp. 10-11. 以下この書からの引用は括弧内の数字で示される。引用文中の下線は、筆者が引いた。
- 3) Carlos Baker, *Hemingway: The Writer as Artist* (Princeton: Princeton University Press, 1980), p. 299.
- 4) Vicki Hearne, *Adam's Task*. 川勝他訳『人が動物たちと話すには?』(晶文社, 1993年) 98頁。
- 5) 「^{フアーデン}糸 (Farden)」に関して、次を参照されたい。「もともと精神にしか姿をあらわさないものによって心を高められてゆく人のなんと少ないことであろうか。われわれにもっとずっと大きな力をふるっているのは、感覚や感情や気分である。しか

しこれも当然のことである。われわれが普通依拠しているのは生活であって、観察などではないのだから。

しかし、残念なことに認識や知識にたずさわる人においても、望ましい関心はあまり見られない。悟性的な人間、つまり(普遍的なものではなく)特殊なものに眼を向け、厳密な観察を目指し、全体を部分に分解していく人間にとって、理念から出発し理念に還ってゆくものは、いわば手に余る代物なのである。悟性的な人間は、好き勝手に自分の迷宮の中に安住してしまい、そこからすみやかに連れ出し、どこまでも導いていってくれる糸フューデンなど決して求めようとはしないのである。」ゲーテ『自然と象徴』(富山房百科文庫, 1987年) 36頁。

- 6) サカナのアイコンに関しては、益田朋幸『ビーターラビットの謎』(東京書籍, 1997年) 88-89頁、鐸木道剛・定村忠士『アイコン』(毎日新聞社, 1993年) 21頁を参照した。
- 7) Vicki Hearne, 前掲訳書 70頁。
- 8) Carlos Baker, *op. cit.*, pp. 316-7.
- 9) この日本語「実体的な」に対応する英語は substantial (本質論的な) か ontological (存在論的な) のいずれかに当たる。
- 10) Carlos Baker, *op. cit.*, p. 290.
- 11) ゲーテ『ファウスト』『ゲーテ全集 3』(潮出版社, 1992年) 21頁。
- 12) Carlos Baker, *op. cit.*, p. 290.
- 13) ゲーテ『箴言と省察』『ゲーテ全集 13』(潮出版社, 1980年) 205頁。
- 14) Susan F. Beegel, "Hemingway as a Naturalist," Linda Wagner-Martin ed., *A Historical Guide to Ernest Hemingway* (New York: Oxford University Press, 2000), pp. 54-55.
- 15) *Ibid.*, pp. 62-63.
- 16) *Ibid.*, pp. 67-75.
- 17) *Ibid.*, pp. 75-80.
- 18) Ernest Hemingway, *The First Forty-Nine Stories* (London: Jonathan Cape, 1979), p. 364.
- 19) *Ibid.*, pp. 366-67.
- 20) *Ibid.*, p. 369.
- 21) Earl Rovit & Gerry Brenner, eds., *Ernest Hemingway* (Boston: Twayne Publishers, 1986), pp. 111-12.
- 22) Carlos Baker, *op. cit.*, p. 309.